慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 『封神演義』作者による神仙像の改変について：長耳定光仙と燃灯道人を中心に |
| Sub Title | The immortals' image in "Feng Shen Yen Yi"(封神演義) |
| Author | 山下, 一夫(Yamashita, Kazuo) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1997 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.72, (1997. 6) ,p.39- 61 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0039 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『封神演義』作者による神仙像の改変について

## ——長耳定光仙と燃灯道人を中心に——

山下　一夫

### はじめに

『封神演義』は、武王伐紂故事を背景として、神仙の二大勢力「闡教」と「截教」の抗争が関わり、最後に太公望による戦没者の「封神」によって終わる、明代の長編小説である。作中には多数の神仙が登場し、さながら中国における神仙説話の集大成の感がある。ただその中には、主に文献上に現れる神仙と、民間信仰的な神仙とが混在しているほか、作者の創設になると思われる神仙も登場し、さらに仏教の神仏なども、もともと中国の神仙だったものが、のちに帰依したものだとされる等、その神仙像は一見したところ非常に雑駁な印象を受ける。本稿は、これらの神仙に一定の検討を加えることで、ある程度整理して捉えることが出来るのではないか、ということを、考えてみたい。

また、『封神演義』の作者については、これまで許仲琳・陸西星・李雲翔などの説が出されているが、いずれも定説とはなっておらず、検討すべき点は少なくない。(1) 無論、『封神演義』に限らず、一般に中国において小説作者の伝記資

料は乏しく、作者像を考えることは困難なのだが、それも『封神演義』については、作品中の神仙像の偏向を検討することで、ある程度方向性が見えてくるのではないか、と思われる。

さて、『封神演義』に登場する神仙についての論考としては、一九六二年に柳存仁氏が発表した『佛道教影響中國考』がある。[2] ここでは『封神演義』作者が神仙説話を作中に採用した際に、元のものに対して様々な改変を加えたことが指摘されている。本論は、この研究をふまえつつ、作中登場する「長耳定光仙」と、それから「燃灯道人」について、『封神演義』作者が作中に採用した典拠について検討し、さらにそれに対してどのような操作を加えたかについて、考えてみたいと思う。

## 一、　定光について

『封神演義』には「長耳定光仙」という神仙が登場する。初出は第七十七回である。截教側のリーダーである通天教主が、多数の門弟を従え、闡教側の神仙たちに戦陣を仕掛けるため、碧遊宮から降りてくるところで、截教側の神仙の一人としてあらわれる。以下にその場面を引用する。

次の日、碧遊宮の通天教主がやってきた。空中には仙楽が鳴り響き、美香が立ちこめ、沢山の截教の神仙が付き従っている。…（中略）…さて多宝道人は空中に仙楽が鳴り響くのを聞き、師匠たちがやってきたのを知って、慌てて陣外へ迎えに出た。そして案内して共に陣に入り、八卦台に坐ってもらった。門人たちは台の下に侍立する。そこには上四代弟子、すなわち多宝道人、金霊聖母、無当聖母、亀霊聖母が並んだ。また金光仙、烏雲仙、毘蘆仙、霊牙仙、虬首仙、金箍仙、長耳定光仙が相従っていた。通天教主は截教の鼻祖であり、修煉成って五気朝元、三花

聚頂し、万劫といえども滅びぬ体を有していた。子の刻になって、五気が天に立ち上る。燃灯は截教の師尊たちがやってきたことを知った。[3]（第七十七回、老子一氣化三清）

次に登場するのは第八十三回から第八十四回にかけてで、通天教主が長耳定光仙に「六魂旛」という秘密兵器を使わせ、闡教を攻撃しようとするが、長耳定光仙は截教を裏切って闡教に下り、西方教の教主である接引道人と準提道人に帰依する。これは作中では多く仏教に出自を持つ神仙であることを暗示している。

さて元始天尊は次の日、篷より下りて、門人たちに金鐘玉磬を鳴らすよう命じた。三教の聖人たちは門人たちを率いて共に万仙陣を破ろうとする。そこで通天教主は長耳定光仙に言った。「わたしは兄弟子たちと西方教の二人の道人と戦う。わたしが六魂旛を動かせ、と言ったら、おまえは間違いなく六魂旛を動かすのだぞ。良いな！」長耳定光仙は言った。「しかと心得ました。」そこで通天教主は戦闘に赴く。しかし長耳定光仙は心中思った。「わたしが今まで聞いているのと違って、前日目にした十二代弟子はみな道徳の士のようだ。昨日目にした西方教主も、三つの舎利が頂上に輝き、まことに道法限りないといった様子であった。[4]」（第八十三回、三大師收獅象孔）

通天教主は神仙たちが沢山殺されるのを見て、心中大いに怒り、急ぎ叫んだ。「長耳定光仙、はやく六魂旛を持ってくるのだ！」しかし定光仙は接引道人の、白蓮で身を包み、舎利が輝く姿を見て、また十二代弟子や玄都の門人たちがみな瓔珞や金灯を持ち、光が身を包むのを見て、かれらはみな出自が清く、それに引き替え截教は畢竟劣っていると思った。かれは六魂旛をしまい、こっそり万仙陣を抜け出して、蘆篷の下へ行って身を潜めた。…（中略）…老子と元始天尊は定光仙を見て尋ねた。「お前は截教の門人定光仙ではないか。なぜこのようなところに身を潜めておった。」定光仙は地にひれ伏して言った。「お師匠様に申し上げます。わが師は修煉により六魂旛を作り

上げ、お師匠様二方および西方教主、武王、姜子牙に危害を加えるべく、わたしに命じて使わせようとしました。しかしわたしはお師匠様が道理に正しく、わが師は誤った言説を鵜呑みにし、かような罪業をなそうとしているのが解り、使うに忍びず、ここに身を隠していたのでございます。いまお師匠様がおたずねになったので、わたしはありのままを報告した次第です。」元始天尊は言った、「何と！おまえは身は截教にありながら、心は正しい方向をむいている。もともと器があったのだな。」そこで蘆篷に上るよう命じた。四人の教主は坐って、今日正と邪とがまさに分かれようとしていることを話し合った。老子は定光仙に言った。「六魂旛を持ってきてくれるか。」定光仙が差し上げると、西方教主が言った。「この旛から周の武王や姜子牙の名を取り去り、開いてみて、われらの修煉の程は果たしていかほどか、試してみようではないか。」そこで準提道人は旛から周の武王や姜子牙の名を取り去り、定光仙に命じて旛を広げさせた。そこで四人の教主は頭の上にそれぞれ珍宝を出現させ—元始天尊は慶雲を、老子は玲瓏塔を、西方教主の二人は舎利子を—自分の身を保護した。定光仙はこれを見て、旛をすてて平伏し、言った。「今回は全くわが師が邪念を起こして、無量の生霊を滅ぼそうとしただけでございました。」…（中略）…西方教主は言った。「定光仙はわが教に縁あり。」元始天尊は言った。「かれが今日ここに至ったのも、邪を棄て正に帰せんとする思いによるものだ。道兄に帰依するのも道理だ。」定光仙は遂に接引・準提の二人の教主を師と拝した。[5]（第八十四回、子牙兵取臨潼關）

『封神演義』の長耳定光仙は、登場するのはこれだけで、ほとんど端役である。また、老子だとか、元始天尊だとか、哪吒だとかに比べて、特に馴染みのある神仙というわけでもない。そういったこともあってか、これまでの『封神演義』研究でも、特に注目されてきたことはなかった。[6] しかし、この長耳定光仙も作者の依拠したと思われる資料があ

る。以下にまず、それについて触れてみたい。

まず漢訳仏典中には、前世の釈尊に授記を行った定光仏という過去仏が登場する。[7] ただし中国では、例えば布袋和尚は弥勒菩薩の化身だということで、布袋弥勒になったり、後にも触れるが、毘沙門天は唐代の李靖という人物と習合したりというように、仏教の神仏が誰か特定の人物と結びつく、という傾向がある。そして、この定光仏も例外ではなく、やはり一定の人物と結び付いてゆくのである。

その一人として挙げられるのが、五代の耳相行修という僧である。

まず『宋高僧伝[8]』「漢杭州耳相院行脩(ママ)伝」に載せるその伝を見てみよう。

釈行脩(ママ)、俗姓は陳、泉州の人である。わかくして北巖院に身を投じて出家し、つつしんで課を受け、読経しよくつとめた。十三歳で剃髪し、長楽府（福州）の戒壇にゆき、上品律儀を受けた。十八歳にして雪峯山義存禅師のもとに参じ、皆とともに教えを乞い問答をしたが、未だ詮旨を解さなかった。行脩(ママ)は義存に暇乞いをし、「浙江に行こうと思います。」と言った。義存が言うに、「お前のすがたかたちを整え、かの二人に様相を目睹させ、発心させなさい。」そこでその耳を指して言った。「輪郭は幸いに長くなっているが、耳朶は短いようだ。わたしはお前のために伸ばしてやろう。」両手で均一に引っ張ると、長さはただちに肩にまで及んだ。これを三度行い、この時から行脩(ママ)の耳は長く垂れてしまい、見る者は目を見張るようになった。後唐の天成二年（九二七）に浙中に入った。街中の者が行脩(ママ)を仰ぎ見、集まった布施ははなはだ多かった。そこで庵を西関の高峯に構え、静かに閑居した。ここは後に盛んになり、大きな寺院となった。行脩は別に何か唱えるでもなく、黙黙として坐し、人に訊ねられてもただ笑うのみであった。人々はその耳を引っ張って、頤の下で結ぶなどした。杭州の人は長耳和尚と号した。後漢の乾

祐三年（九五〇）十一月、病気になったが、いつもと変わらぬように日常を送っていた。三月の夜に坐化した。檀越弟子はそこで行脩（ママ）の遺骸に漆布して保存した。これは今もまだある。後、睦州の刺史陳栄の夢枕に立って、「わたしの坐化はいまだ完全ではない」と言うので、調べてみると、もともと漆布していない所が解ったので、更に手を加えて完成させた。(9)

耳相行修は前半生を福建で過ごした。雪峯義存は後梁の開平二年（九〇八）に坐化しているから、(10)少なくともそれまでには十八歳だったということになろうか。のち福建を離れて浙江に移り、杭州に居を構えた。なお、当時ここを支配していた呉越は仏教を保護したことで知られる。後唐の天成二年（九二七）というのは、呉越でいえば宝正二年にあたり、銭鏐が位にあった頃である。その長く伸びた耳により、長耳和尚とよばれた。

この長耳和尚行修が、のちに定光仏の化身とされてゆく。次に『武林西湖高僧事略』(11)に載せる伝を見てみよう。

師、名は行修、号は法真、泉南の陳氏の出である。家は裕福で、儒学を好んだ。しかし師は清静に専心し、俗世間にいることを好まなかった。十三歳で出家し、諸国を遍くまわり、雪峯山義存禅師のもとに参じた。師は生まれつき異相の持ち主で、耳が肩まで垂れ、上は頭のてっぺんを越えていて、下は下顎で結べるほどであった。時に長耳和尚と号した。後唐の天成二年（九二七）、天台山国清寺の寒巌より銭塘（杭州）に遊んだ。呉越国王は賓礼の待遇をもって迎え、法相院に居せしめた。…（中略）…乾祐四年（九五一）十一月二日、（呉越王の）銭氏は誕生日であったため、僧に供養を施した際、永明に「ここに聖僧はいるか？」と問うた。永明はそこで、「長耳和尚は定光如来の化身でございます。」と答えた。永明は戒めを侍者に与えて言った。「長耳がもし来たら、わたしはもう寝てしまったとだけ言いなさい。」師が永明のもとへ参上すると、侍者は永明の戒めのとおり師に告げた。すると師

は永明の履き物をひっくり返した。翌日坐化した。門人が遺骸を漆塗りして保存した。これは今でも残っている。北宋の崇寧二年（一一〇三）、崇慧大師の諡を賜る。[12]

僧への供養を行った呉越王とは乾祐四年（九五一）だから銭弘俶ということになろうか。永明とは銭弘俶に重んじられた銭塘の永明延寿のことであろう。[13]『宋高僧伝』とは幾つかの点で相違があるが、何と言ってもここで定光仏と結び付いているのが注目される。これ以後、行修は定光仏の化身であるとされてゆくのである。

なぜ定光仏と結び付いてしまうのかについては疑問が残るが、『武林西湖高僧事略』での付加部分が、あるいはこれを理解する手がかりとなるかもしれない。すなわち、法真という号と、天台山国清寺寒巌という地名である。

まず法真という号については、定光仏であるとされ、やはり法真と呼ばれた僧が同時代にもう一人いるのである。大随神照がその人である。『古尊宿語録』巻三十五「大随開山神照禅師行状」[14]によれば、神照は剣南梓州塩亭県（いまの四川省塩亭県）の人で、天彭（いまの四川省彭県）の大随山に居し、時の蜀王（五代十国の後蜀）に慕われて三度招かれたが応ぜず、乾徳元年（九六三）に八十六歳で坐化した（従って生年は乾符五年（八七八）となる）。そして、

> 諱は法真、容貌は古朴で威厳があり、眉は垂れて睫毛を覆い、老宿輩がみな定光仏の示蹟であると言っていたのをかつて聞いている。[15]

という記述がある。

またもう一つ、後唐の天成二年に天台山国清寺の寒巌から杭州に入ったという点については、この天台山にもやはり耳の長い定光という名の僧がいるのである。やや時代は遡るが、南朝・陳の定光[16]である。『続高僧伝』の智顗伝[17]によれば、定光は智顗を夢で天台山に来るよう手を振って招き、のち智顗が天台山に登ると、「むかし手を振って招いたこと

を覚えているか」と言ったという。この話は「定光招手」として『祖庭事苑』[18]巻五にも引かれているが、『宋高僧伝』の志通伝に引くところでは以下のようになっている。

昔智顗はその石の上で僧が海に臨んで手を挙げ自分を招いている様子を夢に見た。智顗は天台山に入ってその僧に会った。名前は定光といい、耳は聳えたつように上に伸びていて頭の頂を越えており、また計り知れない神僧であった。[19]

こうした大随神照や定光のことが耳相行修の伝承に混入したのか、あるいは逆なのか、あるいはともに同一の由来を持っているのか、よく解らないが、少なくとも何らかの形で関連があったことは充分予想できることである。

このほか、さらに南安自厳という人物も定光仏の化身とされる。伝としては比較的早いと思われる『禅林僧宝伝』[20]を見てみよう。

禅師の諱は自厳、鄭氏に生まれ、泉州同安の人である。十一歳で家を棄て、建興の臥像寺の沙門であった契縁の童子となった。十七歳の時に大僧となり、行脚して廬陵（江西省吉水付近）に至り、西峯雲豁に謁した。西峯雲豁は、清涼智明の高弟で、雲門文偃の嫡孫である。…（中略）…淳化乙卯[21]の年の正月六日、衆を集めて言った、「わたしはこの日に生まれた、そして今が正にその時である。」遂に右脇に臥して坐化した。享年八十二、僧籍にあること六十五年。夏、定光円応禅師と諡した。[22]

南安自厳は雲門文偃の三代後だから南嶽下十世ということになる。定光という諡はやはり定光仏の化身とされるからのようである。「定光円応普慈通聖大師事状」[23]には以下のような話が見える。

（大師は）盤古山に至り、井戸の水が涸れていた。そこで杖でこれを叩いて「出てこい出てこい」と言った。する

と夜中に水のポタポタという音が聞こえ、朝には溢れ出ていた。これを知った人々は言った、「盤古山に定光仏が現れた[24]」。

福建省武平や台湾省淡水などにある「定光廟」はみな自厳を祀るもので[25]、特にこれらの地域では自厳＝定光仏という結びつきが強いようである。

ほかにも『曲洧旧聞』巻一[26]には、宋の太祖趙匡胤が定光仏の化身であるという話が記されている。

五代の世、群雄が割拠し、戦乱が続いた。ある僧がいて、瘋癲を装っていたけれども、その言葉は思いもよらず当たるのであった。かつてある人に言った、「もし太平を欲するのなら、定光仏の世に出るのを待つがよい。」太祖が天下を統一するに至って、みな定光仏の化身だとしたのは、思うにこの僧の言葉に依るのであろう[27]。

以上のことからすると、五代北宋初のころは定光仏化身の説が多数行われたことがうかがわれる。弥勒と結び付く布袋和尚もまたこの頃（貞明二年（九一六）卒）の人であり、この時代はそうした傾向のあったことが推測される。そして何人かの人物が定光仏と結び付き、それらはあるいはお互いに影響関係もあったであろうが、その中で、最終的に耳相行修（と南安自厳）が優勢となったものと考えられる。

さて長耳定光仏行修の話は明清の筆記などにも現れ、宋以後も引き続いてこれが行われていたことが解る。例えば、明・朱国禎撰『湧幢小品』巻二十八「長耳和尚」の項には以下のようにある。

定光仏は、はじめ和尚であったとき、法真と号した。耳の長さは九寸もあり、上は頭のてっぺんを越え、下は頤で結べるほどであった。呉越王はこれを賓礼をもって迎え、定光院に居せしめた。坐化してのち、なきがらは漆塗りされたが、目は閉じ口はいささか開いているという様子であった。院は寺に拡張され、正殿は真ん中に置かれ、な

きがらは左に置かれて、これを覆う楼が建てられた。正殿はしばしば火事になったが、火は楼には及ばないのだった。[28]

また清・陸次雲撰『湖壖雑記』「法相寺」の条には以下のようにある。

武林（杭州）には仙仏のミイラが二つある。一つは丁野鶴で、もう一つは長耳和尚である。和尚の名は行修で、耳の長さが何寸もあり、上は頭のてっぺんを越えていて、下は下顎で結べるほどであった。呉越王が僧に供養を施そうとした際、行修はひさごを引っ提げてやってきた。永明禅師が呉越王に言うのに、「この長耳和尚は定光古仏の応身でございます」。そこで王は駕をうながしてこれに礼した。長耳和尚は笑って、「永明は饒舌だ」と、言い終わるや、結跏趺坐して坐化してしまった。そこでその体は漆塗りにされ、法相寺の中に保存された。毎年正月六日に開帳し、たくさんの人に公開する。この日参拝に来る者は、争って爆竹を放ち、その音は山谷に響きわたり、紙銭が堆く積まれる。後継ぎを求める者は、仏前で競って紅い蠟燭を抜く。婦人が潜って来、仏の下半身を撫で、子宝を祈る。この習俗の最も笑うべきものだが、数年来改まっていない。（椒峯の評）永明が行修を知っていたことは、豊干が拾得を知っていたこととどこも異なる所がない。[29]

ここで一月六日という日付が登場しているのに注意したい。これは南安自厳が坐化したとされる日である。耳相行修と南安自厳とは、ほぼ同時代の人で、同じく泉州の人であり、かつ同じ定光仏の化身とされるのであるから、混同は起きやすかったはずである。したがって恐らくここにも何らかの影響関係が存在するのであろう。実際、福建省武平には、両者を同一人物として合流させる伝承も存在する。[30]

さて、以上「長耳定光仏」の伝承について検討してみた。『封神演義』における「長耳定光仙」の題材は、おそらく

これに違いないであろう。

## 二、　燃灯について

さて、『封神演義』には燃灯道人という神仙が登場する。これは長耳定光仙などとは違って、『封神演義』の主要登場人物の一人である。初出は第十四回で、息子の哪吒に追われる李靖を助け、玲瓏塔を授ける。ここは李靖が托塔天王と呼ばれるようになる因縁譚となっている。

李靖は跪いて言った。「危ないところを助けていただき、誠にありがとうございました。先生のお名前は？いずこの名山、いずこの仙府にお住まいか？」道人は言った、「貧道は霊鷲山元覚洞の燃灯道人である。なんじは修道成らず、人間界の富貴を享受しているが、いま、商の紂王は徳を失い、天下は大いに乱れている。なんじは暫し官を辞し、山谷にこもって、名利を忘れよ。そして周の武王が兵を興すのを待ち、これを助けて再び功をなせ。」李靖は叩頭して、陳塘関に戻り、その後隠遁した。[31]（第十四回、哪吒現蓮花化身）

その後、第四十五回に再び登場し、作中では闡教のリーダー格の神仙として非常に活躍する。以下にその登場場面を引用する。

さて皆で誰が中心になって陣を破るかを議論し、お互いに譲り合っているときに、空中より一人の道人がやってきた。鹿に跨って雲に乗り、香風が立ちこめる。その容貌は奇怪で古朴であり、まことに仙人の領袖、仏祖の源流である。…（中略）…神仙たちは霊鷲山円覚洞の燃灯道人がやって来たことを知って、みな篷より下りて出迎え、一礼をして坐した。燃灯は言った。「道友の方々は先にいらっしゃっているというのに、貧道は遅れまして、まこと

に申し訳ない。さてかくも凶悪な十絶陣を攻めるに当たって、一体どなたが中心になられるのかな？」[32]（第四十五回、燃灯議破十絶陣）

この燃灯道人というのは漢訳仏典中に見える燃灯仏を指すと思われる。しかし燃灯仏とは実は先に見た定光仏の別名である。[33] つまり定光仏と燃灯仏とは同じものを指しており、長耳定光仙と燃灯道人とは同一の過去仏に由来をもっているのである。

ただし、作中で燃灯道人は、長耳定光仙とは違い、「仏祖源流」と称されるなど、過去仏としての本来の性格が前面に出ている。また霊鷲山円覚洞（元覚洞とも書かれる）という居所は恐らく釈尊の謂であり、[34] 托塔天王に玲瓏塔を授ける役目も『西遊記』では釈尊が担うもので、作中では明らかに釈尊にかわる位置を占めているが、これも燃灯道人が過去仏として本来的に釈尊と並ぶ存在であることを示すものであろう。

ところで中国では定光仏と燃灯仏が別々のものとして扱われたと思われる。神仏の誕生日や吉凶・占いなどを記した『玉匣記』という道書があるが、これをみると、一月に定光仏の聖誕が、八月に燃燈仏の聖誕が記されている。以下にその比較的早いものとされる万暦続道蔵本『諸神聖誕日玉匣記等集』[35] を見てみよう。

正月初一日天臘之辰　彌勒佛聖誕
初八日定光佛聖誕　江東聖誕
初九日玉皇上帝聖誕
十三日劉猛將聖誕
十五日上元天官聖誕

初八日至十五日、顯大神通降魔、此日戒齋、比常日有千萬功德。

…（中略）…

八月初三日竈君聖誕

十五日太陰朝元之辰宜守夜燒香

二十二日燃燈佛聖誕

初三日二十七日北斗下降（傍点は筆者による、以下同じ）

一月八日が定光仏の、八月二十二日が燃燈仏の聖誕日となっている。これは両者が同一ではなく、別々のものとして扱われていたためであろう。おそらく、定光仏という語は、先に見たように一定の人物と結び付いたことから、燃燈仏という語と分化したのではないだろうか。

なお、ここでは定光仏聖誕を一月八日につくるが、この続道蔵本は通行本の系統とはかなりその記述に出入りがある。いまそれに属する清・光緒刊本[36]の当該箇所を以下に示す。

正月初一日天臘之辰　彌勒佛聖誕

初三日孫眞聖誕　座眞人聖誕

初六日定光佛聖誕　初八日江東神聖誕

初九日玉皇上帝聖誕　十三日劉猛將軍聖誕

十五日上元天官聖誕　門神戸尉聖誕　佑聖眞君聖誕

正一靖應眞君聖誕　混元皇帝西子帝君聖誕

初八日至十五日、顯大神通降魔、此八日持齋、比常日有十千萬功德。
…（中略）…
八月初一日神功妙濟眞君聖誕即許眞君
初三日竈君聖誕　初三日廿七日北斗下降
初五日雷聲大帝聖誕　初十日北嶽大帝聖誕
十二日西方五道聖誕　十五日太陰朝元之辰宜守夜焚香
十八日酒仙聖誕　廿二日燃燈佛聖誕
廿三日伏魔福將張顯王聖誕即漢桓侯翼德

こちらで見ると、定光仏聖誕は一月八日ではなく、一月六日になっている。この日付は、先に『禅林僧宝伝』『湖墻雑記』などで見た行修や自厳の坐化した日と一致している。

さて、以上のことからすると、『封神演義』は、少なくとも明代までには起こっていた定光と燃灯の分化を反映して、一方を長耳定光仙、一方を燃灯道人とした、と推定することも可能であろう。

## 三、『封神演義』における重出の構造

ここで柳存仁氏が『佛道教影響中國考』で指摘している点について少し考えてみたい。

『封神演義』には毘沙門天に由来する神仙が二人登場する。一人は托塔天王李靖、もう一人は多文天王である。もともとの毘沙門天が、中国に入って唐代の将軍、李靖と結び付いたのが前者であり、四天王の一としていわれるのが後者

である。両者は比較的早い段階で分化してしまったものと考えられる。[37] しかし『封神演義』作者は両者はもともと同一のものだと気づいていた可能性がある。それはなぜか。

『封神演義』に登場する商の太師、聞仲は、その他の武王伐紂故事ものには見えず、作者の創出になると思われる人物であるが、柳存仁氏は世宗嘉靖帝の時の道士で皇帝の信任の厚かった陶仲文がモデルであり、仲文の字を転倒させさらに字を故意に「文」から「聞」にかえたものだとした。第六十九回及び第八十六回で現れる「文聘」も、第九十九回では「聞聘」になっているが、これも決して誤記ではなく、すべて作者の意図が働いているものだとする。[38] そうすると『封神演義』第九十九回で多聞天王が多文天王になっているのも、やはり誤記ではなく、同様に作者の意図が反映していると考えられるのである。

聞仲が陶仲文を指すのかどうかについては議論の余地があると思うが、ここで柳存仁氏が言っている『封神演義』作者の意図については考慮すべきことである。一般に『封神演義』作者が神仙の出自にこだわって名称に操作を加えるということは、他にも『西遊記』にも登場する楊二郎が楊戩になっていたり、ふつう太上老君というところが老子になっていたりというところから容易に見出しうる。上述の毘沙門天の場合も、同様に来源への自覚による改変であろう。毘沙門天と言わず、托塔天王李靖という呼称を採用したのも、また多聞天王の「聞」の字を「文」にかえたのも、両者が本来同一のものであるという出自を自覚していたため、少しずつ字をずらし近接を避けたのだ考えられるのである。こうした同一の神格が重出してあらわれる際の改変については、この他にも三清の例が挙げられる。

ここで三清についても若干考察を加えてみよう。道教では周知のように、いわば最高神格として玉清元始天尊、上清霊宝天尊、太清太上老君の「三清」がある。しかし、『封神演義』ではこの三清に当たると思われるものが二つ登場す

るのである。

一つは神仙のヒエラルキーの頂点に立つ老子、元始天尊、通天教主の「三教主」である。「上清霊宝天尊」のかわりに通天教主となっているのが少し違うが、最高神格として元始天尊と老子とあと一人が出てくると言うのは明らかに三清を意識したものだと思われる。

もう一つは、第七十七回で老子の使う幻術として出現する、上清道人、玉清道人、太清道人の「三清」である。ここでは、通天教主と戦うことになった老子が、頭の上に「三道の気」を出現させると、これが化して「三清」となり、東から上清道人が、南から玉清道人が、北から太清道人が現れ、通天教主を取り囲んで攻撃するが、通天教主はかれらの素性が解らず、苦戦をするけれども、結局「三清」は実体のない「気」で、老子の幻術でしかないので、忽然と消滅する、というものである。

『封神演義』作者は何故このように二つも「三清」を登場させたのだろうか。柳存仁氏は以下のように述べる。(39)

『封神演義』作者は玉清元始天尊、上清霊宝天尊、太清太上老君の三清が神仙のヒエラルキーの頂点に立つという伝統的通念を無視し、老子と元始天尊、それに截教のリーダーである通天教主という独自の「三位」を作り上げ、更にその上位に紫霄宮に住む鴻鈞道人なる神仙を創出し、万仙陣の戦闘の後、かれの三人の弟子たちを調停する役割を与えた。そして霊宝天尊はこの新しい「三位」からは除外されたのである。…（中略）…しかし霊宝天尊は伝統的信仰においては重要な存在であり、そのため『封神演義』作者は別に霊宝大法師という新たな人物を創出して、崑崙山玉虚宮の元始天尊十二代弟子の一人に加えざるを得なかった。

そして仏教には法身、報身、応身の三身説があり、道教の三清説はこれを真似て、老子を元始天尊、太上道君、太上

老君としたのだ、とする『朱子語類』巻百二十五に見える記事を紹介し、

南宋の朱熹の意見は『封神演義』作者の考えにとって非常に重要であった。作中創出した「三位」は二つの対立するセクトの敵対者からなり、かつ同一小説中で、老子に三清を放たせ、朱熹の言葉に見られるような一般の「誤った」通念を正そうとしたのだ。

と述べている。

柳存仁氏の説を補足すると、玉清元始天尊、上清霊宝天尊、太清太上老君の「三清」という通説を、『封神演義』作者は無視し、位階もかえて老子、元始天尊、通天教主とした。通説では元始天尊が上位な訳だが、『朱子語類』にいう老子中心説により、「三清」を老子に帰属させ、あわせて老子を最上位とする「三教主」の枠組みも再構成した。結果的には、三清に由来を持つ枠組みが二つ出来上がった。それは、三清説の来源に配慮したものであるということが出来る。そうするとここにも、さきに毘沙門天のところで見たのと同じ神仙の出自にこだわろうとする操作が見出されると言って良いのではないだろうか。

そこで長耳定光仙と燃灯道人に戻ると、これについても、同様の操作が見えるのではないかと思われるのである。つまり『封神演義』作者は、定光仏は、過去仏的な燃灯と、中国化した長耳和尚とに分化しているのだということを意識していたため、まず、定光仏は単に定光仏でも良いはずだが、これをわざわざ長耳定光仏という言い方を持ってきて名称の上での近接を避けて、さらに中国化した長耳和尚だということを示し、截教側の神仙に配する。また、対する一方の闡教側に燃灯道人を配して、両者を対照させる。と、そういう作者の操作がうかがえるのではないかと思うのである。

## おわりに

『封神演義』は、一見したところ様々な神仙が登場し、非常に雑駁な印象が強く、その記述は「荒唐無稽」であるとされてきた。しかし、それらを細かく見て行き、整理して考えると、その背後には当時の民間信仰などを反映させつつ、神仙の来源を意識して改変を加えようとする、『封神演義』作者の様々な配慮が見えるのではないかと思う。そうした『封神演義』の記述の独自性について考える場合、周辺の小説などとの比較も問題になってくるわけであるが、その辺についての検討は今後の課題としたい。

### 注

(1) 許仲琳説は、明本である内閣文庫蔵『封神演義』舒載陽刊本の巻二に「鍾山逸叟許仲琳編輯」とあることから、魯迅などが唱えたが、署名からして南京の人らしいというほかは未詳で、また巻二のみに見えるという不明な点を残す。陸西星説は、『曲海総目提要』(または『伝奇彙考』)巻七「順天時」の、「『封神演義』は元の道士陸長庚の作ったものというが、当否は解らない(封神傳係元時道士陸長庚所作、未知的否)」という記事により、「元」は「明」の誤り、陸長庚はすなわち後世に内丹東派の祖と仰がれた明代の道士陸西星の字とし、孫楷第・柳存仁両氏らによって唱えられた。最近さらに章培恒氏がこれを全面的に否定して、舒載陽刊本の序によって「はじめの若干部分を許仲林が、これに手を入れつつ残りの大部分を李雲翔が」作ったとする説を出しているが、李雲翔にしても署名から字が為霖、邯江の人だとするほかは不明である。なお、ここでいう「作者」とは、『武王伐紂平話』『列国志伝』など先行する商周革命故事ものを下敷きに『封神演義』を完成させた、いわば「改作者」のことである。

(2) Liu, Ts'un-Yan (柳存仁), "Buddhist and Taoist Influences on Chinese Novels volume. 1: The Authorship of the Feng Shen Yen I (佛道教影響中國考)". Otto Harrassowitz. Wiesbaden, 1962.

(3) 次日、果見碧遊宮通天教主來了。半空中仙音響亮、異香襲襲、隨侍有大小衆仙、來的是截教門中師尊。…（中略）…話説多寶道人見半空中仙樂響亮、知是他師尊來至、忙出陣拜迎、進了陣、上了八卦臺坐下、衆門人侍立臺下、有上四代弟子、乃多寶道人・金靈聖母・吾當聖母・龜靈聖母。又有金光仙・烏雲仙・毘蘆仙・靈牙仙・虬首仙、有金箍仙・長耳定光仙相從在此。通天教主乃是掌截教之鼻祖、修成五氣朝元、三花聚頂、也是萬劫不壊之身。至子時、五氣冲空。燃燈已知截教師尊來至。（なお『封神演義』の引用は以下舒載陽刊本に依り、句読点などは四雪堂本を底本とする作家出版社排印本（一九五五、北京）を参考にした。）

(4) 且説元始天尊次日下篷、分付衆門人、鳴動金鐘玉磬。三教聖人率諸門人共破萬仙陣。只見通天教主分付長耳定光仙曰、「但吾與你師伯共西方二位道人會戰、吾叫你將六魂磨動、你可將旛磨動、不得有悞！」長耳定光仙曰、「弟子知道。」通天教主打點會戰。且説長耳定光仙自思、「我前只見師伯左右門人、總共十二代弟子、但是道德之士。昨日又見西方教主、三顆舍利子頂上光華、眞是道法無邊。」

(5) 通天教主見萬仙受此屠戮、心中大怒、急呼曰、「長耳定光仙快取六魂旛来！」定光仙因見接引道人白蓮裹體、舍利現光、又見十二代弟子玄都門人俱有瓔珞、金燈、光華罩体、知道他們出身清正、截教畢竟差訛、他將六魂旛收起、輕輕的走出萬仙陣、逕往芦篷下隠匿。…（中略）…老子與元始見長耳定光仙、問曰、「你是截教長耳定光仙、未何躱在此處？」定光仙拜伏在地曰、「師伯在上、弟子有罪、敢稟鳴師伯。吾師煉有六魂旛、欲害二位師伯並西方教主・武王・子牙、使弟子執定聽用。弟子因見師伯道正理明、吾師未免偏聽逆理、造此業障、弟子不忍使用、故收匿藏身于此處。今師伯下問、弟子不得不以實告。」元始曰、「奇哉！你身居截教、心向正宗、自是有根器之人。」隨命跟上蘆篷。四位教主坐下、共論今日邪正方分。老子問定光仙曰、「你可取六魂旛來。」定光仙旛呈上。西方教主曰、「此旛可摘去周武・姜尚名諱、將旛展開、以見我等根行如何。」準提隨將六魂旛摘去「武王」・「姜尚」名諱、命定光仙展布。定光仙依命、將旛連展數展。只見四位教主頂上各現奇珍。元始現慶雲、老子現塔、西方二位教主現舍利子、保護其身。定光仙見了、棄旛倒身下拜、言曰、「似此吾師妄動嗔念、陷無萬生靈也！」…（中略）…西方教主曰、「定光仙與吾教有縁。」元始曰、「他今日至此、也是棄邪帰正念頭、理當皈依道兄。」定光仙遂拜了接引・準提二位教主。

(6) 柳存仁前掲論文一八四頁～一八五頁に若干触れる所があるが、別の登場人物である毘盧仙と混同しており、誤りが目立つ。

(7) 仏典中の定光仏については注（33）を参照のこと。

(8) 大正蔵No.二〇六一。宋・贊寧撰。

(9) 釋行脩、俗姓陳、泉州人也。少投北巖院出家、小心受課念克勤。十三削髪、往長樂府戒壇受上品律儀。年始十八參雪峯山存禪師。隨衆請問、未知詮旨。辭存師言入浙去。存曰、「與汝理定容儀、令彼二人睹相發心。」遂指其耳曰、「輪郭幸長垂璫猶短、吾爲汝伸之。」雙手平曳登即及肩。如是者三。自此長垂見者擧目。後唐天成二年丁亥歳入浙中。傾城瞻望檀施紛紛。遂構室于西關高峯、爲其宴息。後爵成大院。脩別無擧唱默默而坐。人問唯笑而止。子女牽其耳交結於頤下。杭人號長耳和尚。以乾祐三年庚戌歳十一月示疾、動用如平時。以三月中夜坐終。檀越弟子以漆布、今亦存焉。後寄夢睦州刺史陳榮曰、「吾坐下未完。」檢之元不漆布。重加工焉。（巻三十「漢杭州耳相院行脩傳」）

(10) 没年は「唐福州雪峯廣福院義存傳」（『宋高僧伝』巻十二）、及び黄滔「福州雪峯山故真覚大師碑銘」（『黄御史集』巻五）に依った。南嶽下六世にあたり、門下から雲門宗をひらいた雲門文偃が出ている。なお雪峯山は福州にある。

(11) 卍続蔵二乙・七・三。宋・元敬元復同述。

(12) 師名行修、號法眞、泉南陳氏。家本豪右、尚儒學。師獨存心清淨、不樂處俗。十三出家、遍參諸方、得法於雪峯禪師存公。師生有異相、耳垂至肩、上過於頂、下可結頤。時號長耳和尚。後唐天成二年、自天台國清寒巖遊錢塘。呉越國王待以賓禮、居南山法相院。…（中略）…乾祐四年仲冬二日、錢氏以誕辰飯僧。問永明、「此會有聖僧否。」永明曰、「長耳和尚乃定光如來化身也。」既而永明預戒侍者曰、「長耳或來、但云我寝矣。」師詣永明、侍者依戒告之。師取永明革履覆之而返。翌日坐逝。門人漆其全身、至今存焉。崇寧二年賜謚崇慧大師。（「五代長耳相和尚」項）

(13) 『宋高僧伝』巻二十八「宋錢塘永明寺延壽傳」によれば、生没年は唐・天祐元年（九〇四）から北宋・開宝八年（九七五）で、法眼宗をひらいた南嶽下九世法眼の孫弟子にあたる。一般に『宗鏡録』の著者としてしられる。

(14) 卍続蔵二・二三・二～四。宋・渭蹟編。

(15) 師諱法眞。貌古有威、眉垂覆睫。嘗聞老宿輩、皆稱爲定光佛示蹟。

(16) 生年は不明。没年は『嘉定赤城志』（宋・陳耆卿撰。四十巻。嘉定十六年修。清・嘉慶二十三年刻『台州叢書・乙集』本）巻三十五「定光」伝によれば陳の大建十三年（五八一）である。

(17) 大正蔵No.二〇六〇。唐・道宣撰。巻十七「隋國師智者天台山國清寺釋智顗傳」。

(18) 卍続蔵二・一八・一。宋・善卿編正。

(19) 昔智顗夢其石上有僧臨海上擧手相召之状。顗入天台見其僧名定光。耳輪聳上過頂。亦不測之神僧也。(巻二十三「晋鳳翔府法門寺志通傳」)

(20) 卍続蔵二乙・一〇・三。宋・慧洪撰。

(21) 淳化年間(九九〇～九九四)に乙卯の年はない。周必大「汀州定光庵記」(『平園續稾』巻四十)・劉將孫「定光圓應普慈通聖大師事状」(『養吾齋集』巻二十八)は南安自巖の没年を大中祥符八年(一〇一五)とする。

(22) 禪師諱自巖、生鄭氏、泉州同安人也。年十一棄家、依建興臥像寺沙門契縁爲童子。十七爲大僧、游方至廬陵、謁西峯耆宿雲豁。豁者、清涼智明禪師高弟雲門嫡孫也。…(中略)…淳化乙卯正月六日、集衆曰、「吾此日生、今正是時。」遂右脇臥而化。閱世八十有二、坐六十有五。夏謚曰定光圓應禪師。(巻八「南安巖巖尊者」)

(23) 注(21)参照。

(24) (大師)及至山。見井泉竭。以杖立叩云、「快出快出。」中夜聞落泉濺崖之聲。旦而湧溢。有識者云、「盤古定光佛出。」

(25) なお福建省汀州の定光廟については王増能「談定光古佛—兼談何仙姑」(『武平文史資料』総第八輯、中国人民政治協商会議・福建省武平県委員会文史資料工作組編、一九八七)に、台湾省淡水の定光廟については尾崎保子「定光古仏廟(一)(二)(三)」(『学苑(昭和女子大学)』六五〇・六五一・六五六、一九九四)にそれぞれ詳しい報告がある。

(26) 宋・朱弁撰。なおまた巻八には南宋の高宗も太祖趙匡胤に続く定光仏の再出世であるという話を載せる。

(27) 五代割拠、干戈相侵。有一僧、雖佯狂而言奇中。嘗謂人曰、「若要太平、須待定光佛出世。」至太祖一天下、皆以爲定光佛後身者、蓋用此僧之語也。(『四庫全書』子部雑家類所収十巻本による)

(28) 定光佛、初為和尚、號法真。耳長九寸、上過于頂、下可結頤。呉越王賓禮之、居定光院。既寂、漆遺蛻、目翕口微張。以院為寺、正殿居中、翕蛻居左、覆以樓。殿屢燬、不及樓。(『筆記小説大観』第二輯所収本による)

(29) 武林仙佛之肉身有二、一丁野鶴、一長耳和尚也。和尚名行修、耳長數寸、上過於頂、下可結頤。呉越王方飯僧、行修攜瓢適至。永明禪師告之曰、「此長耳和尚、定光古佛應身也。」王趣駕禮之。和尚笑曰、「永明饒舌。」語畢、跏趺而化。遂漆其身、藏於法相寺中。毎正月六日、請出爲郡人瞻禮。人至是日、於寺前賭放爆竹、聲傳空谷、衆響爭流、積紙盈寸。求嗣者、於佛前競拔紅燭。婦人潛來、摸佛下體、以爲宜男。此俗之最可笑者、歴年不改。／永明之識行修、何異豊干之

知拾得。椒峯（清・丁丙輯『武林掌故叢編』清光緒中錢塘丁氏嘉惠堂刊本第八集所収本による）

(30) 王増能前掲論文によれば、元の至治元年に景環という僧が自厳ゆかりの南厳の前に建立した『元至治自厳尊者碑』に、耳相行修と南安自厳の合流した伝承を載せるという。この碑そのものは光緒二十七年（一九〇一）に盗難に遭い、行方不明となったが、丘復纂・民国三十年修『武平縣志』中に残る碑文の概要、及び宣統元年（一九〇九）に前碑文を受けて新しく立て直した『定光大師來厳事跡』（王増能前掲論文に写真とその全文を録する）によって、その内容を知ることが出来る。それによれば、「南安自厳は行修とも号し、杭州から汀州南厳にやってきて居を構えたが、その後杭州に戻り、そのままそこで寂したが、その像は南厳に安置された、また（宋の）真宗朝においても活躍した」、というものであるらしい。

(31) 李靖跪而言曰、「老爺廣施道德、解弟子之危厄、請問老爺、高姓大名？那座名山？何處仙府？」道人曰、「貧道乃靈鷲山元覺洞燃燈道人是也。你修道未成、合享人間富貴。今商紂失徳、天下大亂、你且不必做官、隱於山谷之中、暫忘名利。待武周興兵、你再出來立功立業。」李靖叩首在地、回關隱跡去了。

(32) 話説衆人正議破陣主將、彼此推讓、只見空中來了一位道人、跨鹿乗雲、香風襲襲。見得他相貌稀奇、形容古怪？眞是仙人班首、佛祖源流。…（中略）…衆仙知是靈鷲山圓覺洞燃燈道人、齊下篷來、迎接上篷、行禮坐下。燃燈曰、「衆道友先至、貧道來遅、幸勿以此介意。方今十絶陣甚此凶惡、不知以何人爲主？」

(33) 燃灯仏と定光仏は同一語 dīpaṁkara の別訳語である。漢訳仏典中の燃灯仏授記物語については、赤沼智善「燃燈佛の研究」（『佛教研究』第六巻三号、一九二四。今収『原始佛教之研究』法蔵館、一九八一）・田賀龍彦「燃燈仏授記について」（『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』平楽寺書店、一九六六）に詳しい論考があるが、それによれば、『増一阿含』『四分律』『六度集経』『太子瑞応経』では定光、『佛本行集経』では然燈の訳語をあて、『小品般若波羅蜜経』は燃燈とするという。なお柳存仁前掲論文一四四頁では、『妙法蓮華経』が燃燈とするので、これに依ったのではないかとする。

(34) 霊鷲山は釈尊説法の場として仏典中にしばしばあらわれる。柳存仁前掲論文一四五～一四六頁では、『妙法蓮華経』の説法の舞台であることに注目し、燃灯仏も同書中にあらわれることから、『封神演義』作者と『妙法蓮華経』の特殊な結びつきを示唆する。また円覚洞は『円覚経』に由来するとする。

(35) 『諸神聖誕日玉匣記等集』万暦続道蔵・冠四、SN一四八〇。

(36) 東京大学図書館蔵、『繪圖増廣玉匣記』咸豊三年序・光緒六年刊。引用は巻一「三元五臘聖誕日期」から。なお、『玉匣記』通行本については、吉岡義豊（『吉岡義豊著作集』第一巻二五一頁、初出は一九五二）・石井昌子（『道教』第一巻一七九頁、平河出版社、一九八三）・劉枝萬（『台湾の道教と民間信仰』三五八頁、風響社、一九九五）の諸氏による校本がある。

(37) 柳存仁前掲論文二一七～二二三頁 "The Story of Vaisravana and Nata"。

(38) 柳存仁前掲論文二四九～二五二頁 "Wen chung (Premier Wen T'ai-shih) and T'ao Chung-wen"。

(39) 柳存仁前掲論文一三〇～一三四頁 "Three Pure Ones (San Ch'ing)"。

（本稿は日本中国学会第四十八回大会にて口頭発表したものに基づいている）